

連載¹⁰⁹

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み
「ネット社会」論

見直しが必要な 日本社会の完璧主義

数調査をしなければならないことになってきたのに、勝手に東京都に対してサンプル調査を指示していたことは不適切である。しかし問題は、そのサンプルから全数を推測するための復元（補正）を過つて行わず、サンプルだけを集計するという初歩的なミスをして犯していた結果、全体統計の数値が誤つたことになっていった点にある。

全数調査とサンプル調査の選択は、どれだけ正確性を追求するかということであり、あくまでもコストパフォーマンスで考えなければならぬ。大きな負担をかけ、経費もかかる全数調査をせずに、簡便なサンプル調査を選んだこと自体は、統計学的にも正しい方向で、財政難の政府の役人としてむしろ褒められるべき選択だったのではないか。

厚生労働省によると、「かつては五百人以上の事業所の数も少なかったので全数調査をすることだったようだ。しかし、大企業が増え、調査が大変になったのでサンプル調査に替えたのだが、統計委員会の承認を得る手続きを怠っていた」とのこと。

後になって、未承認や復元の過ちを認知しても隠蔽して放置していたことは、それだけ

でも大不祥事である。しかし、国会でも指摘されているように、秘密裏に復元（補正）して数値を跳ね上げたタイミング、サンプルの大幅な入れ替え、さらに、問題発覚後、無理矢理に早期解決を図ろうとする態度など、背景を疑いたくなる数々の疑問については徹底的な解明と責任の追及が必要である。

だが、忘れてはならないことは、サンプル調査の数値の復元（補正）を過つた十六年前の初歩的ミスの原因を解明し、今後の教訓としなければならぬ点である。そもそも事の発端はここにあるし、ミスの原因である不注意の防止策を取らなければ同じことが起きる。

過度な要求が不祥事の一因？

この件をきっかけに、他の政府統計でも杜撰な実態が次々に明らかにされ、また、民間企業においては数々の検査不正が起き、日本の信頼性が損なわれてきている。このような不祥事はさまざま要因で起きているのだから、海外生活を長くした筆者には、日本社会が求める過度な正確性（完璧性）にも遠因があるように思う。社会が求める正確性に、現実がついていけなくなっていると考え

賃金や労働時間の動向を把握する厚生労働省の「毎月勤労統計」が不適切だった。雇用保険失業給付の過少受給など、実害があったばかりか、実質賃金が上昇していたとの判断も誤りだったらしい。

何が不適切だったのか

当初、「全数調査をしなければならぬのに抽出（サンプル）調査をしたため誤つた統計数値になった」とあたかも違法なサンプル調査をしたことが問題であるかのように安易に解説するメディアが多かった。これは、大変ミスリーディングであり、誤報に近い。正確な統計のためには全数調査が必要だという完璧主義の信仰があるから、このように短絡的に理解するのだと思う。

確かに、五百人以上の事業所については全

るのである。今回の毎月勤労統計の事案も経済の発展により全数調査自体が過大なものになっていくのではないかと。

日欧の考え方の違い

海外では日本ほどの正確性や完璧性を求めないことが多い。その違いがよく分かる事例が身近にたくさんある。

ヨーロッパではバスに乗る場合、運転手が切符をチェックしない場合が多い。従って、乗車のために時間がかかることもなくスムーズに発車するし、運転手は安全運転に集中できる。ごくまれに検札員が乗車してきて検札を行う。その際、無賃乗車だと大きな罰金を取られるので誰も無賃乗車をしない。

鉄道も同様で、改札口さえない。それに引き換え、日本では複数の改札口でチェックを受け、その上、指定席や新幹線ではまず検札もある。



問題の発信源は厚生省だった

スイスの電気の検針は一年に一回だけである。もちろん転居の前には検針があり、清算される。日本では、毎月検針であったが、最近ではスマートメーターを設置して、リアルタイムで常時使用量の記録を取っている。

人手がかかり、不便である検札や検針を必要最小限にする工夫をして効率性の向上を考える海外に対し、日本では多大な投資をして電子機器に置き換えてもより正確性を追求する。

人手を電子機器に置き換えられる場合は完璧主義をまっとうできるが、置き換えられなければ問題が発生する。検査資格のない検査員により車の完成検査が行われていた不祥事件があった（日産無資格検査事件）。輸出車には不要な検査が、国内販売の車には義務付けられている。この事件は、完璧な検査を求めた日本の制度と国際スタンダードで合理化を求めたゴーン氏との軋轢の結果ではないだろうか。

海外では他人の電話から長距離電話をかけても料金は自分の電話番号にチャージできるといふ取り扱いがあった。電話局には料金を徴収できる保証がないが、発信者の利便に配慮したサービスである。おそらく回収不能分を加味した料金設定をしていたのだろう。携帯電話の発達でこのような取り扱いの意味も失ったが、日本では電話加入に住民票まで提出させ、そ

の加入者から完全徴収が保証される通話しかできない仕組みになっている。

度を越した完璧主義の弊害

何事も正確で完璧なことは大事であるが、度を越した完璧主義には弊害がある。後で混雑して処理するケースもあるのに厳格な分別を強制する自治体によるごみ収集、停止線前で完全停車をすると左右の視野が取れず確認ができないのに完全停車を求める自動車免許、年相応の年寄りに年齢確認を行う窓口等等、些細な支障に過ぎないケースが多いが、社会的に大きな問題を抱えたケースもある。

例えば、小学校の運動会で児童が何日も練習して分刻みの一糸乱れぬ行動をとられるのは、自主性や個性の涵養を阻害し、現代の要請にまったく合わなくなっているのではないかと。

長く慣れてきた者には感じないだろうが、外国で生活した者には不合理と映る正確性を過度に求める制度や慣習は実に多い。



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務局長就任。通信・電力・自動車関係企業や各種団体の役員、大学教授などを歴任。IEEE名誉会員。